

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：32675
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2013～2017
課題番号：25380144
研究課題名(和文) 文明社会論の王党派の起源をめぐる政治思想史研究

研究課題名(英文) The Royalist Origin of the Enlightenment

研究代表者

犬塚 元 (INUZUKA, Hajime)

法政大学・法学部・教授

研究者番号：30313224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：「文明社会論の王党派の起源をめぐる政治思想史研究」と題する本研究課題では、17世紀の王党主義・君主主義の思想(とくに君主政をめぐる政治思想、歴史理解)が、18世紀啓蒙の文明社会論の思想的起源のひとつであることが、テキスト上の根拠にもとづいて解明された。これは、ヨーロッパの政治思想史・社会思想史における18世紀啓蒙の位置づけをめぐる修正を迫る研究知見である。

研究成果の概要(英文)：This research project uncovered the royalist origin of the Enlightenment. Especially it closely investigated David Hume's History of England, and his reception of the Restoration royalists' ideas on civilized monarchy.

研究分野：政治思想史

キーワード：王党主義 君主主義 啓蒙 文明社会論 歴史叙述

1. 研究開始当初の背景

(1) 「文明社会論の王党派の起源をめぐる政治思想史研究」と題した本研究課題は、研究代表者の中長期的な研究計画のなかでは、これまでの研究成果を架橋するという位置づけにあった。研究代表者は、デイヴィッド・ヒュームやエドモンド・バークなど、18世紀啓蒙の政治思想をめぐる研究からキャリアを開始したうえで、その後は、絶対主義や王党主義をめぐる国外での研究の急速な進展をふまえながら、新たに、17世紀の王党主義・君主主義の政治思想の再検討作業にも着手してきた。

(2) 本研究の着想の出発点となったのは、「ヨーロッパ的な、文明化された君主政」や「民衆が多くの特権を持つ絶対君主政」という、ヒュームの議論をめぐる検討作業である。この含意や起源については、国内外でこれまでほとんど分析されてこなかった。研究代表者は、17世紀王党派の君主政論を分析する過程で、約1世紀後のヒュームの君主政理解との類似性に気づき、両者の思想的関係に関心を抱くに至った。

2. 研究の目的

「文明社会論の王党派の起源をめぐる政治思想史研究」と題した本研究課題は、「18世紀啓蒙期ヨーロッパにおける文明社会論の思想的起源のひとつは、17世紀の王党主義・君主主義の政治思想であった」という仮説について、デイヴィッド・ヒュームの「文明化された君主政」論の思想的起源を解明する分析を起点にして、その妥当性と適用範囲を検証することをめざした。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題において分析の中心対象としたテキストは、クラレンドン伯ハイドの『反乱史』とヒュームの『イングランド史』であるが、のみならず、電子的に整備された大規模データベース (EEBO、ECCO) も活用して、同時代のテキストを幅広く渉猟して分析する手法を採用した (研究代表者は研究期間途中で研究機関を異動したが、幸いにして、いずれの所属機関においてもこの研究期間のうちに EEBO、ECCO が揃った。国内からアクセスできない資料については、海外での調査を実施した)。

(2) 本研究課題では、王党派の政治思想の受容・継承について、厳密に、史料上の明確な記述 (根拠) にもとづいて分析・検証する手法に拘泥した。こうした手法にこだわったのは、思想内容の単なる近似性・類似性だけでは、思想史上の「影響」や「継承」の関係を確定することは不可能である、という政治思想史学における方法論の蓄積を前提としたためである。

4. 研究成果

(1) 17世紀イングランドの復古王政期における王党派の政治思想について、ハイド、P. ワーイック、R. シェリングムを中心に調査を行い、王政崩壊や内乱の後にあらためて王政を理論的・実践的に正当化した彼らの言説の特質を分析した。その成果は、単著論文「「文明化された君主政」論の王党派の起源」(図書所収) に発表した。

復古王党派は、「絶対的だが制限された君主政」という両義的概念をもちいて復古ステュアート王政の統治を正当化しており、それは、一方で絶対君主政を退けつつ、他方では (議会派が援用した) 混合政体・混合君主政の理念を退ける、という両面作戦のための言説であった。彼らは、「絶対的だが制限された君主政」という、君主政の両義的特質を論じるため、セネカや、セネカを引用したボダンという、政治思想のひとつの系譜に依拠している。また、こうした「絶対的だが制限された君主政」をめぐる復古王党派の政治言説のなかには、文明論 (文明発展論) によって君主政の進歩・発展を指摘する、歴史叙述の政治思想が存在した。

(2) 世俗の国王支持派 (王党派) だけでなく、宗教勢力のなかの国王支持派の言説について、イングランド国教会に注目して調査を実施した。その過程では、近刊のすぐれた研究書 (原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義』創文社) の書評という形態において、ケンブリッジ・プラトン主義をめぐる研究動向や、ケンブリッジ・プラトン主義における宗教対立の克服という啓蒙的課題をめくって、小文を発表した (雑誌論文)。宗教改革以後のヨーロッパ政治思想史には、宗派対立・宗教対立の克服をめざす多様なアプローチを観察できるが、そのうちのひとつには、キリスト教の教義・制度の再定式、というアプローチから宗教対立の克服を試みた系譜が存在した。17世紀のケンブリッジ・プラトニストはその代表として位置づけられる。

(3) 本研究課題の中核的作業のひとつとして、こうした復古王政期の王党主義の政治思想について、とくに18世紀啓蒙期に及ぼした影響を中心にして、その受容史を明らかにする作業に従事した。前述の論文「「文明化された君主政」論の王党派の起源」(図書所収) では、復古王党派の政治思想にみられる、「絶対的だが制限された君主政」論 (君主政をめぐる両義的な言説) 君主政の進歩・発展を指摘する文明論 (文明発展論) が、18世紀啓蒙の文明社会論にも継承されたことを、テキストの引用・言及に注目する手法により解明した。

(4) (3) の研究成果は、18世紀啓蒙の歴史理解の見直しにつながる知見をもたらした。18世紀啓蒙の文明社会論について、従来の通説

は、18世紀における実体的な社会経済的發展からその形成を説明することが多かったが、本研究はこれとはまったく別の、17世紀の国制論・政治論という思想的起源を明らかにした。言い換えれば、18世紀啓蒙の思想史的位置づけをめぐって、従来の通説は、好んで「モダン」(近代)という意味づけを付与してきたが、むしろこれまで「プレモダン」と評価されてきた君主主義・王党主義の思想系譜の延長線上に位置づけられることが明らかになった。本研究課題では、こうした成果をふまえて、18世紀啓蒙の見直しに関連するいくつかの業績を公刊した。そのなかのひとつ、論文「歴史叙述の政治思想：啓蒙の文明化のナラティブ」(図書 所収)では、18世紀の文明論が、君主主義政治思想と同じように、宗教対立の克服という初期近代ヨーロッパの理論的課題に対する応答として位置づけられることを示した。

また、本研究では、18世紀啓蒙のうち、とくにヒュームについて、王党派や君主主義の政治思想が大きな影響を及ぼしていることが判明した。言い換えれば、本研究のもたらした知見によって、ヒュームの解釈において刷新・修正すべき点が多くなからず存在することが判明した。この点にかかわる成果はいくつかの公刊物に結実させることができたが(雑誌論文、学会発表)、予定していたヒュームをめぐる単著図書や、複数著作の翻訳については、本研究期間に公刊することができなかった。

(5) 国内外における王党主義や君主主義の再評価作業は、政治思想史学のリヴィジニズム(研究見直し)の動向と密接に関連しながら進行してきた。王党主義・君主主義にフォーカスした本研究課題では、分析の過程において、ひろく、西洋政治思想史研究における近年のリヴィジニズムに注目すべきことが痛感されたため、思想史学の新しい動向を積極的にフォローすることにも努めた。

まず、これまでの研究史において、王党主義・君主主義が黙殺されてきた経緯や背景を明らかにする必要性から、政治思想史のこれまでの通史叙述や、そのナラティブの構築性について検討作業をおこなった。王党主義・君主主義の思想系譜の重要性が明らかになったことによって、絶対主義・立憲主義という対抗軸を中核に据えた思想史叙述、あるいはより一般的に、既存の政治思想史通史叙述の妥当性を再検討することが不可避となったためである。雑誌論文、パーク受容史をめぐる成果(雑誌論文、学会発表、図書)はこの作業の産物である。17・18世紀ヨーロッパを対象とする政治思想史の歴史叙述は、19世紀末から20世紀初頭に至る時期(通史叙述という叙述形式が成立した時期)の分析枠組みや歴史理解の構図に大きく規定されていることが判明したため、王党主義や君主主義の歴史的再評価の作業に

あたっては、そうした後世における「あとづけ」の要素を特定する必要性・重要性が確認された。

政治思想史研究におけるリヴィジニズムや、初期近代政治思想史叙述の見直しに関連して、当該分野における主導的研究者であるジョン・ポーコックについて包括的な検討をすすめた。その結果、彼の思想史研究・政治理論研究の意義を確定したうえで、彼を「歴史の理論家」として理解する視座を得ることとなった(雑誌論文、図書)。

初期近代政治思想史における歴史解釈の見直しや、通史叙述の再検討作業は、必然的に、政治思想史研究というディシプリンや、その方法論にも問い直しを迫ることにもなった。そのため、そうした問題群についても、本研究課題のメタ領域として取り組みをすすめることとし、結果として、いくつかの成果を得た(雑誌論文、学会発表、そのほか)。政治思想史研究における「国際論的転回」や「感情論的転回」に関しては、「政治学・政治思想史学から見た18世紀ブリテンのコスモポリタニズム」や、「感受性の政治思想」vs.「利己性の政治思想」?

政治思想・政治思想史研究から見たヒュームとその時代」と題して、複数の研究会で報告をおこなった(これらは学会でなく研究会での報告なので、研究実績欄への記載は省略した)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

犬塚元「政治思想の「空間論的転回」：土地・空間・場所をめぐる震災後の政治学的課題を理解するために」、『立命館言語文化研究』29巻1号、pp.67-84、2017、査読無、http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_29-1/lcs_29_1_inuzuka.pdf

Hajime Inuzuka, Seiji-tetsugaku-teki kōsatsu: riberaru to sōsharu no aida (Papers on Political Philosophy: Between Liberal and Social), *Social Science Japan Journal*, Volume 20 Issue 2, pp.287-290, 2017、査読無、doi:10.1093/ssjj/jyx025

犬塚元「歴史の理論家としてのポーコック：その知的軌跡における政治・多元性・批判的知性の擁護」、『思想』1117号、pp.129-159、2017、査読無

犬塚元「Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment* (Edinburgh University Press, 2015)」、『イギリス哲学研究』40号、pp.94-95、2017、査読無

犬塚元「政治思想史の通史叙述の形成期におけるパーク解釈の変転：学説史において、パークはいつから保守主義の創設者とされ

たか、『法学志林』114 巻 4 号、pp.71-84、2017、査読無

犬塚元「書評 政治思想(欧米) 小野紀明『西洋政治思想史講義』(岩波書店)」、『年報政治学』2016-1 号、pp.242-245、2016、査読無

犬塚元、乙幡翔太郎、安藤有史「資料 エドモンド・バーク「断章：イングランド法の歴史をめぐる論考」(全訳)」、『法学』79 巻 5 号、pp.461-470、2015、査読無

犬塚元「リヴィジニズムのなかのキリスト教政治思想：原田健二郎『ケンブリッジ・プラトン主義』に寄せて」、『創文』2015 年春号、pp.10-12、2015、査読無

萬屋博喜・森直人・犬塚元「ヒューム研究の現在」、『イギリス哲学研究』38 号、pp.83-94、2015、査読無

犬塚元「ヒュームの哲学と社会科学をどう架橋するか」、『政治思想研究』13 号、pp.352-353、2013、査読無

〔学会発表〕(計 5 件)

犬塚元「データフィクションの時代における思想・哲学研究：デジタルデータ、デジタルツール(検索、計量分析)をどう活用できるか(コメント報告)」、日本イギリス哲学会・2017 年度研究大会シンポジウム 1、2018

犬塚元「思想史学において保守主義を有意義に論じるために(コメント報告)」、政治思想学会・第 24 回研究大会シンポジウム 1、2017

犬塚元「"That Political Philosophy May Be Reduced to a Science" 松元雅和『応用政治哲学：方法論の探求』(2015.11)の紹介と検討」、社会思想史学会・2016 年度研究大会、2016

犬塚元「Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment* (Edinburgh University Press, 2015) の解釈構図と分析方法」、社会思想史学会・2016 年度研究大会、2016

犬塚元「大震災後の政治と政治学」、政治思想学会・第 20 回研究大会シンポジウム 3、2013

〔図書〕(計 7 件)

中澤信彦(编者)、桑島秀樹(编者)、犬塚元、真嶋正己、苅谷千尋、佐藤空、立川潔、高橋和則、土井美德、角田俊男、『バーク読本』昭和田、2017、293 頁(pp.20-41)

坂本達哉(編)、長尾伸一(編)、J・G・A・ポーコック、伊藤誠一郎、林直樹、生越利昭、門田樹子、米田昇平、犬塚元、篠原久、渡辺恵一、野原慎司、森岡邦泰、中澤信彦、川名雄一郎、小田川大典、太子堂正称、村井明彦、穂刈亨、田中秀夫、『徳・商業・文明社会』京都大学学術出版会、2015、420 頁(pp.147-172)

Jun-Hyeok Kwak (ed.), Koichiro Matsuda (ed.), Duncan Ivison, Qiang Li, Naran Bilik, Hajime Inuzuka, Danielle Chubb, Shi-chi Mike Lan, *Patriotism in East Asia (Political Theories in East Asian Context)*, Routledge, 2014, 182p. (pp.119-135)

杉田敦(編)、川崎修(編)、千葉眞、佐々木毅、荒木勝、柴田平三郎、将基面貴巳、矢吹久、厚見恵一郎、菊池理夫、木部尚志、田上雅徳、清末尊大、的射場瑞樹、竹澤祐文、浅野俊哉、辻康夫、押村高、吉岡知哉、佐々木武、犬塚元、中村敏子他、『西洋政治思想資料集』法政大学出版局、2014、332 頁(pp.140-145)

犬塚元(編)、木村俊道、安武真隆、安藤裕介、小林淑憲、奥田太郎、石川敬史、土井美德、金慧、権左武志、『岩波講座 政治哲学 2 啓蒙・改革・革命』岩波書店、2014、256 頁(pp.vii-xii, 27-49)

古賀敬太(編)、佐野誠、杉田敦、的射場敬一、木村俊道、犬塚元、下川潔、寺島俊穂、野口雅弘、岡崎晴輝、岡本仁宏、蓮見二郎、山崎望、『政治概念の歴史的展開 第 6 巻』晃洋書房、2013、290 頁(pp.97-117)

J.G.A. ポーコック、犬塚元(監訳)、安藤裕介・石川敬史・片山文雄・古城毅・中村逸春(訳)、『島々の発見：「新しいブリテン史」と政治思想』名古屋大学出版会、2013、480 頁(pp.409-425)

〔その他〕

犬塚元「ひもとく リベラルとは何か」、朝日新聞、2017.11.12

犬塚元「民主主義を丁寧に論じる」、『Voters』(公益財団法人明るい選挙推進協会) 38 号、p.3、2017

犬塚元「英国史から見る住民投票」、読売新聞、2014.10.6

犬塚元「政治理論研究の現在：「規範を論じるエッセイ」からの脱却 井上彰・田村哲樹編『政治理論とは何か』に寄せて」、『風のたより』56 号、pp.1-3、2014

犬塚元「名言の舞台」、『Voters』(公益財

団法人明るい選挙推進協会)16号、p.3、2013

犬塚元「名言の舞台」、『Voters』(公益財団法人明るい選挙推進協会)15号、p.14、2013

ホームページ

<http://inuzukah.ws.hosei.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

犬塚 元 (INUZUKA, Hajime)

法政大学・法学部・教授

研究者番号：30313224